Osaka University Knowledge Archive

Title	浦島伝説、海部・高橋連蟲麿作歌
Author(s)	八木, 毅
Citation	語文. 1955, 16, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68489
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

浦島伝説、海部・高橋連蟲麿作歌

八木　毅

一

浦島伝説の主人公は平安時代中期までにはすでに不老長寿の神格として信仰されるに至つてゐる。

嵯峨上皇の四十の賀に際してこの主人公が現れてきたり（「水鏡」）淳和天皇天長二年（八二五十一月四日）、仁明天皇の同じく四十の賀の折に、興福寺の大法師らが浦島が子の像を作り、浦島は常世の国に行つた為に限りなき命を得たといふことを長歌によみこんだりして天皇の長寿を祈請したこともあつた（「続日本後紀」巻十九、嘉祥二年八四九三月二十六日条）。

お伽草子「浦島太郎」の主人公は超時間的な長寿をえたといふ点においてさきの「仁明紀」などの伝とほぼ変るところはないが、ふたたび「蓬萊の山」で夫婦の契を結び、しかも彼らが更に浦島太郎の故郷に浦島の明神として顕はれたといふのは、この伝説を素材とする文筆文芸の、中世的変貌とでもいふべきものである。謡曲浦島では、浦島ではない「蓬萊の仙女」がはじめから浦島の明神としてあらはれてくる。この両者によると「浦島の明神」に対する中世の解釈には二つの立場のあつたことが知られるのである。謡曲浦島はほぼ宮増作と見られてゐるものであるが、作中に亀山院の勅使が登場してくることや、海部（あまべ）の神を祭祀し、海部氏が奉仕する丹波の矢田神社を根拠とする丹波の猿楽が、この曲を摂津の住吉神社の神事に奉つてゐることなどから考へて、これは本来海部の中から生育してきたものであつたのが大和猿楽の大夫官増によつて、その詞章を整へられたものではなからうかといふことが考へられるのである。（小林静雄氏「能楽作者考」能勢朝次博士「能楽源流考」丹波の猿楽参照）　近世に入つてからも浦島伝説は浄瑠璃その他に素材としてとられてきたが、今はそれらに触れないことにする。

右によれば、浦島伝説は平安時代以降、信仰の対象としてあり、さうしたことが契機となつて幾つかの文筆文芸が形成され、殊に謡曲の場合においてはその成立の過程に、海部といふ特殊な部族がその地盤となつてゐることが臆測できさうだといふことを簡単に述べたのである。

二

浦島伝説の論者の多くは、この伝説の原初形態を追求して、やがて万葉集巻九にある高橋蟲麿歌集中の所謂伝説歌がもつとも古い形であるらしいといふ結論にもつてゆく。万葉のこの長歌に関しては、あとで述べることにして、この伝説の奈良時代「丹後風土記」の所

伝につき若干考察してみたい。

丹後風土記は浦島伝説を語るに先立つて、

与謝郡日置里、此里有筒川村、此人夫日下部首等先祖名云筒川嶼子、為人姿容秀美、風流無類、斯所謂水江浦嶼子者也、是旧宰伊預部馬養連所記無相乖云々

と記述してゐるのによつて、この伝説の主人公は日置里筒川村の人であり、この風土記が撰進された時代には彼が日下部の首らの先祖として信じられてをり、またこの伝説を伝承してきたものが日下部の首の一族に関係あつたことも推定しうるのである。日下部の首は姓氏録和泉の皇別に「日下部宿禰と同祖、彦坐命之後也」とあり、（姓氏家系辞典を披見すれば山陰地方に勢力を占めてゐた大族であつたことが分る。）彦坐の命はなほ後述するはずであるが、彼は日下部の首の祖であつたと同時にまた、その支配の下にあつた海部の祖神として奉ぜられてゐた神格でもあつたと考へられるのである（このことについてはまた後述する）。

「馬養の所記」といふものの現存しない今日、丹後風土記の所伝は、全き伝説の形で筆録されて現存するものの中では最も古いものである。そこでわたくしは丹後風土記の所伝を以て浦島伝説の構造・本質につき所説を進めようと思ふ。

丹後風土記の内容を列挙すれば、次の如くである。

①長谷朝倉宮御宇天皇の御世のことであつたといふこと。

②嶼子は独り小船に乗り、こぎでて釣りをしたが三日三夜一魚も得なかつたこと。

③やがて五色の亀を釣つて船中に置き、彼はねむつたが、その内に亀は一人の婦人となつてゐたといふこと。

④その婦人の美しかつたこと。天女であること。

⑤婦人の示す所に従つて船を進めたこと。

⑥大きな島につき、宮殿に至り、婦人が亀の化身であつたことが分つたといふこと。

⑦そこでの生活。

⑧嶼子自身に切なる望郷の心が起つてき、女娘は嶼子の様子に不思議をたててその理由を問ふこと。

⑨故郷に帰ることが決つて玉匣を貰ひ、本土筒川の郷に到つたこと。

⑩故郷のさまはすつかり転変してゐて、三年しか過してゐなかつた筈だのに、この世ではすでに三百余才を経てゐたといふこと。

⑪開いてはいけないといふ約束で貰つてきた玉匣を開いたところ、かぐはしい煙が虚空にたち去り、彼は再びなつかしい女娘の許に帰ることができなくなつたこと。

⑫相聞の歌が二人の間で交はされ、それに後人も追和する。

といふのが、その内容である。

右のうち、⑤から⑨までは異郷（水都）訪問のはなしであつて、この伝説の中心部分である。どのやうに変形したものでも、この部分は具はつてゐて、浦島伝説の本質は、だからこの部分にあるといつても間違ひではない。この部分と①—④および⑩以下との間には時間的、空間的に多元性がある。つまり、「亀比売」の宮殿においては不老不死であり、それゆゑそこは「とこよ」なのである。そして「やまと」から「とこよ」に「とこよ」から「やまと」にゆききするには、必ず「眠目」しなければならないといふ。これは次元転換のために欠くことのできない手段である。

③—⑦によつて所謂神婚説話の要素を指摘することができる。同

類説話をもつ『三論伝説』では、女と動物であり、『海幸山幸神話』や『柘枝伝説』ではいづれも男は漁夫で、女が異類である。『夕鶴』の原話である『鶴女房』の昔ばなしも異類婚姻といふ点で同じである。

⑪について久松潜一博士は「現実を超越して神仙の世界に遊んでも永久にその世界に住することができない点に、伝説が単なる空想ではなくして人間生活に基礎をもつてゐる」ことの証左どみられた（「国語と国文学」創刊号）。

このタブーを犯した結果、再び「とこよ」のくににゆけなくなつてしまつたといふことは、この主人公にとつて痛切な打撃であつたことは⑫の歌によつても知ることができる。これはタブーを犯したことによる一種のキャタストロフに陥つたことを示すもので支那六朝以後の所謂晉唐小説中にも類話を見出すことができる。よく引きあひに出されるのは『捜神後記』（上ノ三）にある「袁相・根碩赤城に遊ぶ」といふ話である。『遊仙窟』では張文成自らが山中仙女の窟に遊び、窟十娘と称する美女とあひ、詩を贈答し一夜を共にして帰つたが、再びいつた時にはその仙境はもう分らなかつた、といふのに過ぎないが、袁相・根碩の方は帰る時に美女から「一腕嚢」を授かる。「慎んで開く勿れ」といはれてゐたのに家人が開けたために根は田に働きに出たまま「蟬脱」して消えてしまつたといふ。これはタブーの破棄によつて「破局」に遭ふといふ構造を示すものであるが、『捜神後記』中の他の伝説、例へば（上ノ五）の「武陵の漁父桃花源に遊ぶ」においては仙境訪問の後、帰らうとすると仙女達に、帰つても他言するなと言はれる。ところが郷里に帰つた主人公の漁夫は太守に報告する。太守劉歆が彼に案内させて官人を行かしめたが、遂に仙境に達することができなかつた（上ノ六）。「劉驎之、衡山に遊ぶ」といふのもよく似てゐる。丹後風土記の所伝も⑪の部分の説話形式はこれらとまづ同種とみることができるが、「破局」の設け方に、④主人公の肉体が衰亡してゆくものと、㋺単に、もう再び仙境を訪ねることができなくなるだけ、といふのと二通りがある。

丹後風土記における「破局」は右の㋺に該当し、⑫の後人が追和した歌といふのに

みづのえの　うらしまのこがたまくしげ。あけずありせば
またもあはましを

といふのがそのことをよく語つてゐる。

丹後風土記によつて浦島伝説の内容を説話的要素に分解すれば、右にみてきた如く異境（仙境）滞留・神婚説話的なものを抽き出すことができる。しかし動物報恩説話が混入するのは中世以降のことであつてここにはまだそのやうな仏教的な説教臭は伴つてゐない。そしてこれらの説話的要素には、仙境の不老不死と、従つてそこにおける短時日がこの世の現実では、とてつもない長年月であるといふことと、仙境が超自然的世界であることとにおいて、時間的空間的な多元性をもつこと。タブーの破棄によつて主人公は不幸に陥ることなどがこの伝説の構造上重要なポイントとなつてゐる。

三

浦島伝説の、右に述べてきたやうないづれかの部分をもつて伝承されてきた「民話」は全国にわたつて分布してゐるやうである。

丹後風土記の所伝は、浦島伝説の筆録されたものとしては現存最

古の全きものと考へてゐること、およびそれが如何なる内容（構造）をもつかは前章において考察してきたところである。

しかしてこの伝説のより原初的なかたちを求めようとするなら、それは文筆文芸的な資料に求めることは不可能である。そこでわたくしはかかる意図を以て、所謂浦島系民話と称されるものを比較検討してみると、それら民話の内容には、いづれも皆それがはなされる時代の理解と興味とに従つて解釈され、脚色されてはゐてもそこにはやはり、ひとつの骨子があつて、それを踏み外すまいとして伝承されてゐるやうに思はれるのである。

それらについて言へば、いづれも主人公が男であること。海中の異郷訪問といふことを主材としてゐること。帰る時には宝物を貰つてくることなどの三点で共通してゐる。丹後風土記の所伝以下における浦島伝説には、神婚説話としての異類婚が話の中心であるのに民話ではそれらしい内容をもつものは少く、また部分的に言へば、主人公が漁夫であることや、報恩説話的要素を具へてゐるものが多いのは、伝説と違つて民話の一般的性格を語るものであるといふことができる。また、亀が主人公を運ぶものも比較的多い。その他、海界を交通する際「目を閉ぢる」といふことがあるのも注目されるところである。

以上は浦島系民話の中から東北八戸地方・瀬戸内海（岡山県佐柳島）・南西諸島（沖永良部島・喜界島）で採集されたものを抽出し、「浦島伝説」との比較を容易ならしめ、かつ、この伝説の原初的なものを求めんがために若干の分析を試みたのである。

これらの中には伝説からの「流伝」の場合もあらうし、また人心の同似作用にもとづく「並存」的発生といふ場合もあつたらうと思ふ。時によつては相互に没交渉に「並存」してゐたものが、その後の交通によつて干渉を起し、いづれかが他に影響され変形されてしまつた。といふこともあつたかも知れない。

しかし、ここで主として考へてゐるのは伝説の伝承についてである。従つて右にみてきたところによれば、民話に神婚説話的な要素が稀薄だといふことは、筆録以前の浦島伝説—つまり丹後風土記所伝の前のもの—を考へる上に一つの手がかりを提供してゐると言へようと思ふのである。

「浦島」に関して現在伝承されてゐるものは右に挙げた如き民話の外に後述する寝覚の床（信州）と、『市井雑談集』（上一九）所出の浦島が玉手匣を開いた所と伝へられてゐる箱根山（相州）とがある。後者について吉田東伍博士「地名辞書」は箱根山東福寺金剛王院の庭前山上に「浦島桜」と称するものがあつたと記してゐる。しかしこれらは、「箱根」といふ地名と「玉匣」との単なる言葉の上での縁によつて附会されたものに過ぎないと考へることもできる。

四

最後に万葉集にある高橋蟲麿の「浦島の歌」について述べたいのであるが、それに先立つて関聯する幾つかの事を考へてみることにする。

万葉集巻五に大伴旅人の仮作と考へられる『松浦河に遊ぶ序』といふのがある。これは太宰の帥であつた旅人が、松浦の県に遊んで玉島の潭で娘子に逢つたこと、その娘子の美しいことを述べ、娘子との問答のことを記し、十一首（八五三—八六三）の贈答歌を載せてゐ

る（最後の三首、後人追和之詩として、これには作者「帥老」と記す）。

これは仲哀紀九年の条に伝へられたこの土地における神功皇后の釣魚の伝説を踏んで、松浦峡の景観に『遊仙窟』の構想を生かして仮作したものである。これは神仙思想にもとづく神仙譚である。万葉集ではこのあとに太宰の官人吉田の宜の旅人に送つた書状と「松浦仙媛の歌にこたふる一首」（八六七）とがあり、さらにつづいて山上憶良が旅人に宛てた考へられる書状とその中に記された三首の短歌（八六八―八七〇）があつて、さきの旅人の作に応じて松浦小夜媛を詠み、さらに大伴佐提比古の郎子と妾松浦佐用ひめとの領巾振山の伝説を語り、かつその短歌五首（八七一―八七五）を残してゐる。この「松浦佐用ひめ」について、高野辰之博士は「松浦の小夜媛」の意味で、それは言ふまでもなく、港町にゐた遊女たちをさした「普通名詞」であつた。それをこの伝説では、一個の人格と化して伝へたのである（早稲田文学第二五三号）と言つてをられる。

さて「浦島伝説」に戻つて丹後風土記をみると⑫の部分に嶼子と神女との相聞歌があり、㋑嶼子―㋺神女―㋩嶼子と一首づつの短歌が交はされ、時人追和の㋥㋭二首がある。その㋺に

神女、遙かに芳音を飛ばして歌ひしく
やまとべに風ふきあげて雲はなれ、
そきをりともよ。わを忘らすな

の歌がある。これは仁徳記に黒日売が天皇に献つた歌として

やまとべに西風（にし）ふきあげて雲はなれ、そきをりとも
われ忘れめや

と伝へてゐるのと殆んど同じ歌謡である。この両者の関聯について藤田徳太郎氏は「此の歌（風土記の）を黒日売の作歌からの転出であると解してはならぬ。むしろ一般的な民謡がかく両種の説話乃至伝説を負はせられる事となつたと見られるのである。従つて、此所においては夫々の説話伝説における固有名詞を取り除いて考へて見る事が必要である。『やまと』の解釈が両者で異なる。仁徳記の方では大和一国の事を意味し、風土記の方では日本全体の意味で用ひてゐると思はれる。これは『やまと』なる語の意味の拡充に応じて変化した使用法であつて、その意味において此の歌の此の語の使用は仁徳記よりも風土記の方が後であると思はれる。従つてこれは大和一国に解する方が原意に近からう。『風』が『西風』と限定せられ、『われ忘れめや』と『わを忘らすな』との間に自他の相違はあつてもこれはいづれでもよい。此の両歌に共通するのは女が男を見送る時の歌であるといふこと、又その男は船に乗つて出帆したものであるといふ事である。かくの如き場合、境遇を考へる時、それは必然的に舟着場にある遊女の歌といふ事が考へられて来る。勿論それは必ずしもその遊女が作り歌つたものといふのではなく、自然的に発生した浮れ女の徒の間の歌なのである」（「日本歌謡の研究」上代歌謡新解）と説明されてゐる。風土記㋺の歌謡のもつ根本的一般的な性質は右の説によつて、つくされてゐると思ふ。ところでさうした民謡が、風土記の⑫中におかれるや、㋑をうけ㋩が呼応する渾然とした相聞的関聯がなり立つのである。そして㋺が本来もつ、強い普遍的な感情・雰囲気は失はれないで匂つてくるのである。

万葉集巻五の松浦峡の娘らにあつて旅人が「風流絶世」と嘆じ、「感応にたへず」と賞しながら、

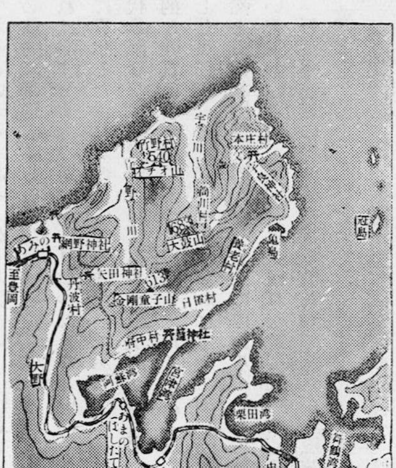
僕問ひて曰く、誰が郷、誰が家の児等ぞ、けだしくは神仙と

いふものか、といふ。娘等皆咲みて答へて曰く、児等は漁夫のいへの児、草庵の微しき者、郷もなく、家もなし、何ぞなのり云ふに足らめや。

といふ問答を交はしてゐる。読者は、初老の高級官僚であり、頽唐派詩人であつた大伴旅人の「神仙境」における遊女たちとの交歓を想像するであらう。

丹後風土記の相聞歌の部分にも、遊女との交歓・訣別を考へうることは右に述べてきた通りである。さらにその浦島伝説の内容について見るに、その中心をなしてゐるのは、異郷―女性のゐる仙宮―における夢幻的な淹留である。

ところで、先に説明を省いた信州寝覚の床の木曽川中に「浦島の釣舟」といふのが伝へられてゐるのによつて、その由来を考へてみると、このあたりは安曇の郡に属し、この伝へと、海部との関係が知られるのである。すなはち、応神紀三年十一月条に、処々の海人が大和朝廷に服さないので阿曇の連の祖大海宿禰を遣はして平げしめ、海人の宰とした、とあり、以来安曇氏は海部の統率者となつてゐること、信濃の国には各郡に安曇氏が分布してゐたらしいが、中でもこの安曇の郡穂高宮造営文書に「住吉」とあるのは、安曇氏の氏神である住吉の神を祀つた処であるによるらしいし、当郡川会神社も海神（綿津見神）を祀つてをり、さらに日置神社の社名、村名（日岐村）は浦島伝説の伝承地として丹後風土記に記されてゐる丹後の国日置の里との関係が考へられる上に、その祭神は彦火々出見命であるといふこれら諸点から、木曽山中に浦島伝説を丹後から伝へてきたのは、安曇氏の部曲にあつた海部によると見ることができるのである。



（図1）丹　後　要　図

後述するやうに高橋虫麿の浦島の歌の場を供した丹後の国網野神社も浦島子の神格である彦坐の命と共に、海部の神である住吉の神を奉祀してゐる。また、丹後の国一の宮である籠神社は天の水分の神を祭神とするが、この神に古代から連綿と奉仕してきてゐるのは現在でも海部の氏を名告る家柄である。謡曲浦島の成立に関係があつたと推定する「丹波のしゆく」の本拠、矢田神社が海神を祭り、海部氏が奉仕してゐることは既に述べたが、これらの事実は浦島伝説と海部との関係の深いことを暗示してゐると見て間違ひないと思ふのである。

丹後風土記に浦島子を日下部の首の祖であるとしてゐることについてはすでにふれてきたが、日本書紀や、姓氏録によると、日下部の首の祖は彦坐の命である。これらの記事から浦島子は直ちに彦坐の命と同一であると見るのは速断に過ぎよう。これは、か

う解すべきではなからうか。和泉や、河内や、摂津などの畿内にあつた日下部氏は本来の如く彦坐の命を祖としたのに対し、丹波（後の丹後を含めての）に所領してゐた日下部の首は、その地方に蟠居てゐる海部の勢力の上に立つ必要から、海上生活者の集団である海部の神格たる浦島子を、その祖と称するに至つたのではないかと思ふのである。この日下部首に海部が従属したといふ考へは、雄略紀や顕宗紀の示す時代より古く安曇氏に統率されてゐたことがあるといふのと矛盾はしない。丹波の海部の上にあつた安曇氏が、その部曲の一部を伴つて信濃の国に移動した後、安曇の支配権を承けて日下部が大和から遣はされてきたといふこともひとつの考へ方として成り立つであらう。

話をもとに戻す。浦島伝説は海宮訪問譚であり、ことに丹後風土記の所伝によると、その海宮には男を魅了する女性がでてきて、男は夢の如き歓楽を尽すといふこと、そしてその訣別の歌には遊女の愛惜の情があるといふことなどを言つてゐたのであるが、このことと、この伝説を支へてきた集団が海上生活を主としてきた海部によつてきたらしいこととに由つて考へるならば、丹後風土記所伝の浦島伝説は、さうした海部の男性たちが、彼らの満たされかたい食色への本然的な欲望を、港町での遊女たちとの交歓の体験を基礎にして、固有の信仰と、そして原初的な伝説との上に、肉付けし、伝承芸術的に造形したものであつたと考へることができると思ふ。

五

万葉集巻九に「水江の浦島が子を詠める一首ならびに短歌」（一七四〇・一）といふのがある。これは高橋蟲麿の作（「高橋蟲麿歌集中出」とあるが、これらをわたくしが蟲麿の作といふことについては、かつてバンセ―第六号―『高橋蟲麿歌集について』に書いてゐる）である。

この長歌にも、旅人の松浦河の作と同じく夢幻的な世界の展開がみられる。

「松浦河」の方での主人公は作者自身であつたのだが、ここでの主人公は「伝説」中の人物そのままである。作者蟲麿は旅人とは反対に題材としての夢幻的世界の外に立つて、登場人物を叙述し、また時には批評する立場に己の位置をおいてゐる。そして彼はさうした現実ならざる世界をリアルに描いてゐる。

蟲麿は、末の珠名娘子（たまな をとめ）や河内の大橋を独りゆく娘子を、きびきびとして手法で形象化したと同じやうに「浦島伝説」は彼によつて、現実の景観の中に具象化されてゐる。

作者が素材から一歩ひきさがつて、騒人としてのまなこをもつて旅先の土地に伝承された物語を表象するといふ方法でこの歌はよまれてゐるのである。

常世（とこよ）辺に住むべきものを、剣（つるぎ）刀（たち）己が心からおぞやこの君（愚カナコトヂヤナイカネ、コノ浦島ガ子ハ）

といふ反歌は、さうした作者の位置を明らかにしてゐるのである。

旅人的な造型と、蟲麿的な造型との相違はこんな具合に、前者は非現実場面を展開して現実を描くのに対して、後者は現実的な場面の展開の中に非現実を描くといふところにある。また、それが造型に参与してゐる環境的諸要素を分析してみても、前者の貴族的自我的なのに対し、後者の庶民的批判的な因子が析出されるのである。

旅人の松浦河の作には「松浦小夜媛」を介して彼の貴族的で淫蕩

な頽唐趣味を見出すことができたが、丹後風土記中の神女の歌として伝へる「やまとべに」の歌謡が遊女を媒として流伝してゐたものと考へられるところから、丹後風土記所伝の「浦島伝説」にあの歌謡が加へられたといふことは、その伝承を語りつぎしてきた部族やあるひはそれを採集し筆録した人たちの間における「浦島伝説」の受容のしかたの問題であつたと考へうるのである。しかし蟲麿のこの作品にあの歌謡がとりいれられてゐないといふことは、蟲麿の制作態度に、もともと口承的な伝説を「採集」するといふやうなつもりがなく、それを単なる素材として、蟲麿的世界を展開しようとする創作的な意欲が、この作品を形あらしめたのである、といふことが考へられねばならない。

「浦島伝説」の論者は、いままで万葉のこの作品と、丹後風土記その他の所伝とを同列において〝伝承文学的〟研究の立場から比較検討してきた。しかしそれは右に述べたやうな理由で非常な誤謬を犯してきてゐたと言へる。また、蟲麿のこの作品は「伝説歌」と称されてきた。それは「伝説を素材としてとりいれてゐる歌」といふ点で使はれるならばいいけれども、さうでなく「伝説を歌によんだ作品」と解されるならば、それは間違ひである。

蟲麿作品の内容とするところは「伝説」の忠実な筆録・伝承ではなく、浦島伝説伝承地における体験としての伝説内容の、個性化された表象である。機械的に伝承内容が「報告」されてゐるのではなくて、天平歌人の芸術的造型の際に、とりいれ、生かされた単なる素材としての「伝説」なのである。それ故、蟲麿の作品を、「伝説研究」の資料として考へるといふのであれば、その資料的価値は丹後風土記の所伝などに、二歩も三歩もゆづらなければならないのである。

人麿以降、万葉の主流が従駕や遊覧の作品を中心に展開してきた中で、それらの表現が生気を欠き、たとへば「見れど飽かぬ」といつたごとき類型的な発想が慣用されるなどの傾向もありながら、また一方には赤人や旅人や憶良や蟲麿のやうに独自の個性・作風を完成しつつあるといふ側面もあつたのが中期藤原の宮から天平にかけての歌壇の一特徴であつた。

蟲麿はかくてその題材の取り方や、表現手法の上で独自の境を拓いた作家であつた。（「バンセ」第八号『高橋蟲麿の用字法』。同第十三号『高橋蟲麿の枕詞使用』同第二十二号『真間娘子と菟原処女』などに書いたことがある）。

浪漫的作風に立つ、さうした作家の作品として蟲麿の「水江の浦島が子」の歌は見られるべきであるといふのがわたくしの考へなのである。

六

次に、この長歌の冒頭部には

春の日のかすめる時に、墨吉（すみのえ）の岸に出でゐて、釣舟のとをらふ見れば、古（いにしへ）のことぞ思ほゆ

とあるのだが、一体この歌が、どういふ景観を前にしてよまれたものであるかについて述べようと思ふ。

右に引用した中にある地名「墨江」は現在の諸註釈にすべて京都府竹野郡網野町であると説いてゐるのは正しい。（武田祐吉博士「万葉集全註釈」や、「早稲田文学」第二五二号の鈴木捨五郎氏は摂津説をとつてゐる）。

もともと「浦島伝説」が伝承されてきたのは既述の如く、丹後国与謝郡・竹野郡にかけての海辺一帯に住居してゐた海部に伝承されてきたものであつて、式内網野神社が、住吉三神を主神として、日下部の首の祖「彦坐の命」を配祀してゐるのに注意しなければならない。彦坐の命といふのは日本書紀開化天皇六年正月の条に「天皇丹波の竹野媛(たかぬのひめ)をめしいれ、妃となし、彦湯産隅命を生み、次の妃、和珥臣(わにのおみ)が遠祖姥津命(おけつ)之妹、姥津媛、彦坐王命を生む」とある神である。

従来「墨吉」を網野町とする論者も、ここにその地名の残らないのによつて疑問を存して来たやうであるが、網野神社が海部(あまべ)や日下部に関係があり、「住吉」の神を主祭し、かつ「浦島子」をも祀つてゐるといふことは、この問題に最後的な解決資料を提供してゐると言へる。

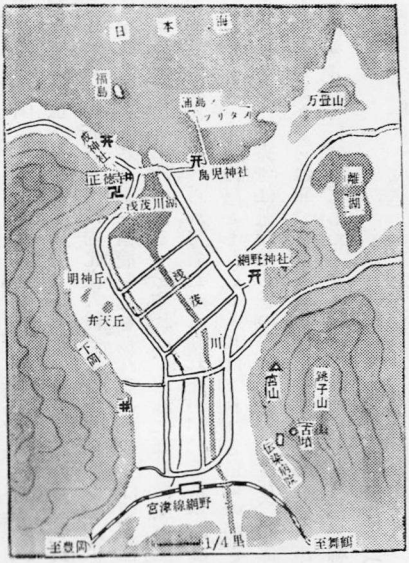
住吉の神が海部と密接な関係に立つといふことは、日本書紀神代の巻四神出生の段に、住吉大神は阿曇連らがいつきまつる神なり、とあるによつて知りうるところである。

網野町には現在「水江」といふ小字が存するが、これは昭和二年三月七日の丹後大震災後の区劃整理に際して附された新地名であるといはれてゐる。しかし古地名で滅びてゐたものをまた掘り出して来たものであるかも知れない。いづれにしても「水江」は沢瀉博士説に従つて、これを普通名詞と解するならば、さやうな地名の有無は問題ではなくなるわけである。

丹後風土記の所伝に「筒川嶼子」とあるのは、与謝郡日置里筒川村、宇良神社を中心とする海部の所伝によるものであることを示してゐるのである。浦島伝説がこの海辺一帯の海部によつて伝承されてきたものであることもすでに述べたところである。従つて浦島伝説の伝承地を、筒川村とするのも間違ひではないし、網野町とするのもまた正しいのであるが、万葉集の蟲麿のこの歌に関する限り、そこに出てくる地名や、「住吉の岸に出でゐて云々」の景観などからしても後者、すなはち網野町とする方が妥当である。

なほ網野神社に保存されてゐる同社の棟札によつて、享徳元年(一四三)に現在の場所に遷坐されたことが分るのであるが、それはこの土地の入江の奥が次第に埋まつて水際線が北に移動したのに伴つたものであるらしく、それまでは現在地の南南東約七丁の根元宮山に鎮坐してゐた。いまその土地からは、硬質蠟製石斧、祝部土器などを出土してゐて、それらは同社々司行待重保氏が保存して居られる。

現在の網野町は、浅茂川によつて次第に入江をうづめてきて出来た沖積層であることは分つてゐる。だが実際問題として、万葉時代



（図2）網野町地図

にどれだけの入江が存したかを確証すべき材料は存しないやうである。一般には、現在国鉄宮津線の網野駅附近までが入江であつたやうに漠然と想像されてゐるやうだが、或はもつと入江の奥行が浅かつたかも知れないのである。現在わづかに往古の面影を残してゐるのは、河口の浅茂川湖である。それは、大正初期でも今の三倍の面積をもつてゐたと言はれてゐることや、筆者が調査にいつた昭和廿八年夏にはなほ干拓工事が行はれてゐたことによつても網野町平地の成立の新しさが推されるであらう。

またこの町の現在の海岸には島児神社があり、その沖には、浦島の釣だめと称するものが見られる。

高橋蟲麿が、この伝説を長歌の題材としたことについて、わたくしは社会的な背景を考へたことがあつた。（バンセ第十五号「高橋蟲麿における伝説歌の位置」）いまはそのことにふれず、もうひとつのことについての私見を述べたい。

丹後の国府は、天の橋立の基部、丹後一の宮のある現在の与謝郡府中村に存したのであるが、蟲麿は地方官として、この国に仕官してゐたか、検税使などのやうな査察使に随行して来国したことがあつたのかも知れない。

この丹後の国の国府から浦島伝説の伝承地、網野（奈良時代「墨吉」といはれてゐたのかも知れない）に訪ねていつたと言ふことには、ちようど、太宰府に対する松浦河、越中の国府に対する布勢の海、飛鳥に対する吉野河の関係を思はせるものがある。

蟲麿の長歌に見られるのは、「墨吉」に対する作者の、旅行者としての新鮮な感動であり、その土地に滲み込んでゐた伝説に直接ふれることのできた多感は詩人の深い感銘なのである。

彼此相考へて、この長歌の由つて来るところ、これに関しての地理について中述べたつもりである。

結語

浦島伝説の史的展開に関して、わたくしの叙述の不備な点を補ふ意味で若干蛇足を加へて結語としよう。

浦島伝説の原初的な、いはば第一段階とでもいふべきものを仮定するならば、それは折口信夫博士が説きおかれたやうに、「古代の村々に海のあなたから時あつて来り臨んで、其村人どもの生活を幸福にして還る。霊物を意味」するまれびとが、「常世の島」からやつてくるといふ信仰を中心としたものであつたらうと考へられる。次に第二の段階として考へるのは、それに主人公や時代や場所などが日下部の首の信仰の上に新たに結びついて「伝説」が成立し、さらに第三の段階として「常世の島」が『山海経』などに見られるやうな海中仙山（蓬萊）の要素をもつに至ると同時に、まれびとが、神女として伝へられはじめる。折口博士は藤原宮時代（「折口信夫全集」第一巻五五頁）に帰化漢人種の影響で、かうした「常世思想」の生じてきてゐることを指摘してをられるのに従へば伊預部の連馬養の時代になるわけである。とすれば、それには丹後風土記所伝の相聞歌の如きも加へられてゐたかも知れないが、それが加はるのをわたくしは、第四段階としたい。それはまれびと信仰の如きに支へられながら、一方では遊女たちとの交歓といふやうな、海部の男性たちの体験がさらに重つて、浦島伝説に対する新しい要素が加はり遊女を介して行はれてゐた「やまとべに」の民謡を含む一聯の相聞

【以下四五頁につづく】